神保美佳のメモ★ランダム ——VOL.23

山田清一氏の「遺骨返還式」

1月中旬、人生で初めての体験をしました。それは、都内にある大学病院で執り行われた「遺骨返還式」に出席させて頂いたことです。この式典は、大学病院に献体（死後、医学生の解剖実習用遺体として提供すること）を行った方たちの遺骨を、遺族に返還するのが目的です。

遺骨の主は、昨年9月に亡くなられた遊技風俗史研究家の山田清一氏であり、生前、氏が編集長を務めていた業界誌で記者として働いていた私も、遺族のご意向で出席させて頂くことになりました。とはいえ、山田氏が亡くなられた当初、私は「献体」という言葉の意味すらよく分かっていませんでした。解剖実習等で使用する遺体は、てっきり身元不明だったり処刑された人物のものであると思い込んでおり、自ら（しかも無償・無条件とのことです）提供する方がいるとは…恥ずかしながら、想像もしていなかったのです。

さらに、返還式当日会場に入った私は、驚きました。会場は数百人分の席が用意された大きな講堂で、壇上には百近くもの遺骨が並べてあったのです。つまり、献体を申し出る方は1人や2人ではないということであり、亡くなった後も医学に貢献しようとされた方々の思いがずっしりと感じられ、しばし遺骨の列から目を離すことができませんでした。

講堂内は、前列から3分の2程度に遺族、後ろには医学生たちが列席し、医学部および歯学部それぞれの代表から「お礼の言葉」も寄せられました。その言葉の中には「人体は、決して教科書通りの構造をしているのではないことが分かった」といったフレーズがあり、学生たちが遺体に対し畏敬の念を持ちながら解剖を行っていたのであろうことが想像できました。それと同時に、もしかしたら将来自分も、この医学生の誰かに診てもらうことがあるかもしれないのだ…などと考えると、改めて山田氏をはじめ献体された方々の有り難さが感じられたのでした。

山田清一氏は、遊技機の発展初期からジャーナリストとして業界を見つめ続けていた方であり、私も3年間ほどではありますが、様々なことを一から教えて頂きながら働いていた時期がありました。教えの中には「資料をきちんととっておき、丁寧に文章を作っていく」という簡単そうで難しいこともありましたが、山田氏は自らの行動によっても、その大切さを教えてくれました。そうした謙虚でありながら強い意志を持った人格には、多くの業界関係者が引き寄せられていて、私も氏との出会いがなければ、今の自分は絶対いなかっただろうと思っています。

もちろん現在も感謝の気持ちは枚挙にいとまがありませんが、業界だけでなく献体という形で医学のためにも貢献しようとされたその姿には、ただただ尊敬の念を抱きつつ、ご冥福をお祈りするしかありません。

山田さん、本当に有り難うございました。安らかにお眠り下さい。

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）